山形市立病院済生館

診ます会 News Letter

Yamagata City Hospital SAISEIKAN

令和5年9月 Vol.61

安全で安心できる医療のために!!

済生館 安全管理室の取り組み

済生館 副館長
安全管理室長
大西 啓祐

日本の医療安全対策の歴史は比較的浅く、1999年に起きた医療事故をきっかけにしています。肺手術と心臓手術の患者を取り違えて手術を行ってしまったこの事故を受けて、2002年から全ての病院で安全管理室の整備が本格化しました。当院でも安全管理室の先輩の方々によりさまざまな対策やルールが作成され、それに基づいて医療を提供してきておりますが、「To err is Human: 人は誰でも間違える」という考えがあるように、インシデントやアクシデントは決してなくなることはありません。

現在の済生館の安全管理室は、中央診療部の各部門である医師、看護部、放射線部、リハビリテーション部、臨床検査部、臨床工学士、薬剤部から安全管理者としての資格を有したメンバーで構成されています。安全管理室の業務は多岐にわたりますが、最も時間を要するのは毎週行っているインシデントレポートの検討です。当院では年間3,000件以上の報告がありますので、毎週約70件の中から改善できる案件に対しては直ちに対策を講じます。従来のルールの変更を要するような案件については安全管理委員会で意見交換を行い、変更を行った後、関係者すべてに周知するよう努めています。重大なアクシデントと考えられる場合は直ちに安全管理室に報告され、当事者から詳しく事情を聴取して医療経過報告書を作成し、検証委員会で検討することもあります。また、緊急時には全職員が共通した対応ができるように、安全ポケットマニュアルを編集・改定・周知しています。その上で全職員が安全な手順に基づいた作業を行えているかどうか確認する安全監査も実施しています。

安全文化の醸成には、年2回ほど院外から著名な講師を招き、全職員を対象とした研修会の企画・運営も行っています。令和4年度には「ヒューマンエラーのメカニズム」と「病院における転倒予防の実態と新しい対策」についての講義を開催しました。院内の各診療部からも定期的に安全講習を実施し、患者のみならず職員の安全も維持できるよう努めています。また、毎年他の病院とも情報交換をする機会を設けてお互いの安全対策の評価や改善策を検討しています。

微力ですが「To err is Human 」を前提としながらも、アクシデントに結びつかないような活動を今後も継続し、診ます会の会員の皆様には「安心して患者をお任せいただける病院」、「職員にも安全な病院」を目指し、今後も活動を続けてまいります。

済生館の外科診療
― Common disease を中心に ―

済生館 内視鏡外科 科長
二瓶 義博

診ます会の先生方におかれましては、日頃より格別のご高配を賜り、心より感謝申し上げます。

本稿では、日々の臨床で携わることの多いCommon disease(急性虫垂炎、鼡径・閉鎖孔・大腿ヘルニア、胆嚢摘出)を中心に当院外科の診療について述べさせていただきます。

手術件数の年次推移

2018年から2022年までの5年間、当院外科で行われた手術は年間700例ほどで推移しており、その中でCommon disease(急性虫垂炎、鼡径・閉鎖孔・大腿ヘルニア、胆嚢摘出)の症例は年間300例前後であり、全手術件数に占める割合も約4割となっております(図1)。

また、当院外科では鏡視下手術を積極的に取り入れ、その割合も年々増加し、近年では約半数の症例に対して鏡視下手術を行っております(図2)。

図1　全手術件数と Common disease 手術件数

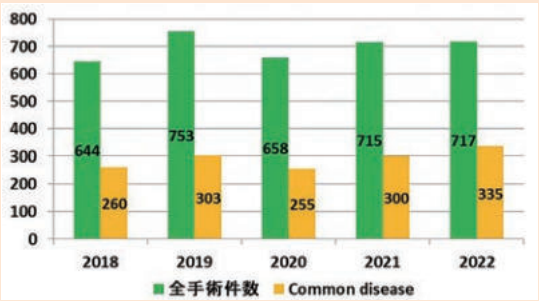
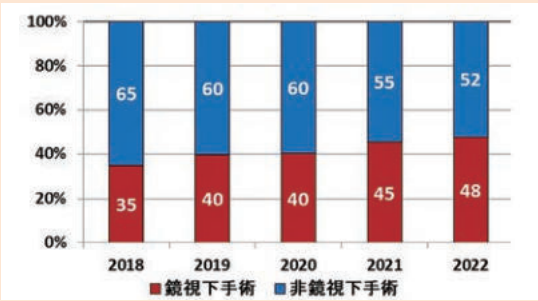


図2　鏡視下・非鏡視下手術の割合



急性虫垂炎

急性虫垂炎は診断の時点で、①抗菌薬投与による保存的治療、②緊急(準緊急)手術による虫垂切除、③膿瘍を形成している膿瘍形成性虫垂炎は経皮的膿瘍ドレナージを選択しております。その中で、手術に際しては年齢に関わらず(幼児から高齢者まで)、ほぼ全例で全身麻酔下・鏡視下に虫垂切除を施行しております(図3)。

また、腫瘍性病変が疑われる虫垂炎症例、再燃を繰り返す虫垂炎症例、膿瘍形成性虫垂炎症例では炎症の改善後に必要に応じて下部消化管精査等を行ったのち、待機的虫垂切除術(Interval appendectomy)を行うこともあります(図4)。

図3　虫垂切除術

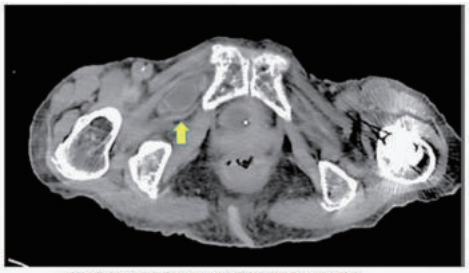
図4　【急性虫垂炎の治療方針】

- 抗菌薬投与による保存的治療
- 緊急(準緊急)手術による虫垂切除
- 膿瘍形成性虫垂炎は経皮的膿瘍ドレナージ
- 数か月後、待機的に虫垂切除(Interval appendectomy)

鼡径・閉鎖孔・大腿ヘルニア

当院において手術件数としては最も多い疾患であり、患者さんの全身状態や ADL(日常生活動作)、嵌頓のリスク等を考慮の上、治療方針を検討しております。多くの場合は待機的に手術を行いますが、嵌頓で受診され用手的に完納できない症例に関しては緊急手術も行っております (図 5)。

図5　典型的な閉鎖孔ヘルニア嵌頓のCT像



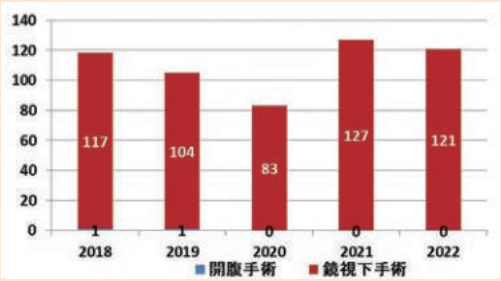
恥骨筋と外閉鎖筋の間の腫瘤像（矢印）

また、手術に関しては、年齢や全身状態・両側ヘルニアの有無・再発ヘルニアの有無などにより適切な術式を選択しております。幼児以外ではメッシュを用いた修復法(Direct Kugel法、Mesh plug法など)を標準術式とし、両側ヘルニア・再発ヘルニアや患者さんの希望によっては鏡視下手術も行っております(図6)。

胆嚢摘出

胆嚢結石症・胆嚢ポリープ・胆嚢腺筋腫症に対して、ほぼ全例で鏡視下に胆嚢摘出術を行っており(図7)、手術中に癒着や出血などにより鏡視下手術から開腹手術に移行した症例は、2018年から2022年までの5年間で552例中4例(0.7%)と非常に少ない結果でした。

図7　胆嚢摘出術

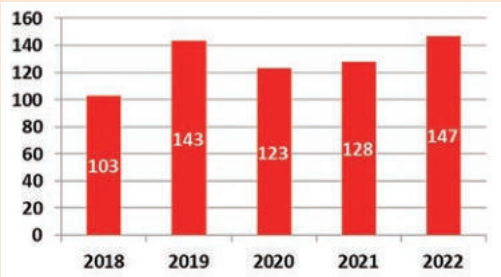


尚、急性胆嚢炎の症例に関しては、①抗菌薬投与による保存的治療、②経皮経肝胆嚢ドレナージ(PTGBD)、③緊急(準緊急)手術による胆嚢摘出などの中から適切な治療法を選択しております。その中で、発症からの時間、全身麻酔下の緊急手術に対する耐術能、既往歴、患者さんの希望などから、緊急手術の適応とされた症例に対しても鏡視下に胆嚢摘出術を行っております(図8、図9、図10)。

緊急手術

前述の急性虫垂炎、ヘルニア嵌頓、急性胆嚢炎以外にも、絞扼性イレウスや上下部消化管穿孔による汎発性腹膜炎などの症例に対しても緊急手術で対応しています(図11、図12)。

図11　緊急手術件数



おわりに

本稿では、診ます会の先生方からも多くご紹介いただいております Common disease(急性虫垂炎、鼡径・閉鎖孔・大腿ヘルニア、胆嚢摘出)を中心に述べさせていただきました。当院では、これら以外にも、食道・胃・小腸・結腸・直腸・総胆管結石などの消化器疾患、肺癌・気胸などの呼吸器疾患などに対しても積極的に鏡視下手術を取り入れております。これからも、低侵襲性の鏡視下手術を中心とした医療を提供すべく、日々研鑽を重ねていく所存でございます。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

図6　鼡径・閉鎖孔・大腿ヘルニア手術

図8　急性胆嚢炎緊急手術

図9　【急性胆嚢炎の治療方針】

- 抗菌薬投与による保存的治療 ⇒ 待機手術または非手術
- 経皮経肝胆嚢ドレナージ（PTGBD）
  - ⇒ドレナージチューブ留置のまま日常生活
  - ⇒約2か月を目途に胆嚢摘出術
- 緊急（準緊急）手術による胆嚢摘出
  - ●発症から凡そ72時間以内
  - ●耐術能や既往歴に問題のない症例

図10　急性胆嚢炎症例

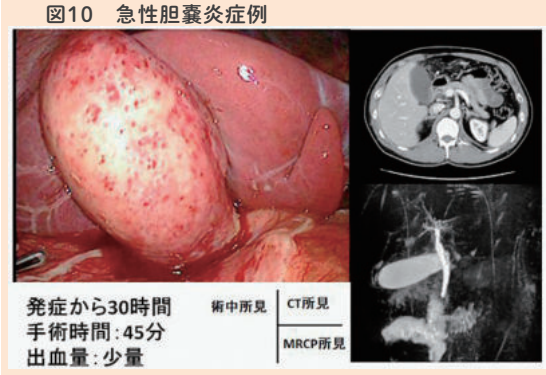
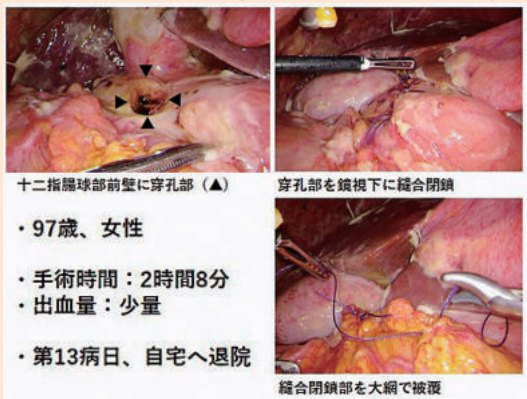


図12　十二指腸穿孔症例(腹腔鏡下穿孔部閉鎖・大網被覆術)



誰に相談していいかわからないこと、まずはお話してみませんか

患者さんの相談窓口「医療相談室」のご紹介

済生館医療相談室
主任社会福祉士
菅野 さゆり

医療相談室は患者さんやご家族の方の病気に関する質問、入院中や退院後の不安など、様々な相談にお答えするための窓口です。多様な職種のスタッフが皆さまと一緒に考え、お悩み解消のためのお手伝いをしております。

医療相談室は専従社会福祉士1名、医師と事務職などの兼任5名、計6名で運営しております。令和4年度の相談件数は2,403件で、その主な内訳は、がん相談が714件、受診・医療に関する相談が520件、他機関からの問い合わせ等が286件、在宅介護に関することが280件となっております。特にここ数年は医療費に関する相談や、在宅看取りについての相談が増えています。

さらに、居住不明、家族の介入拒否、経済的困窮、意思決定能力不足等の患者さんについては、外来受診中から、また入院当日から早期よりご相談を承っております。

全ての患者さんが安心して治療を続けられ、地域で生活できるよう、院内の多職種スタッフ、地域包括支援センター、行政機関などと連携し、情報共有と役割分担を行いながら、全体で支えていける体制づくりを行っております。

地域医療支援病院として、その役割を果たせるよう今後も相談業務にあたって参りますのでよろしくお願いいたします。

皆様のご相談をお待ちしております

- 予約は不要です。
- ご相談は無料です。
- ご相談を希望される方は、済生館相談窓口までおこしください。
- お電話、E-Mailによる相談も受付けております。
- ご相談内容についての秘密は守ります。

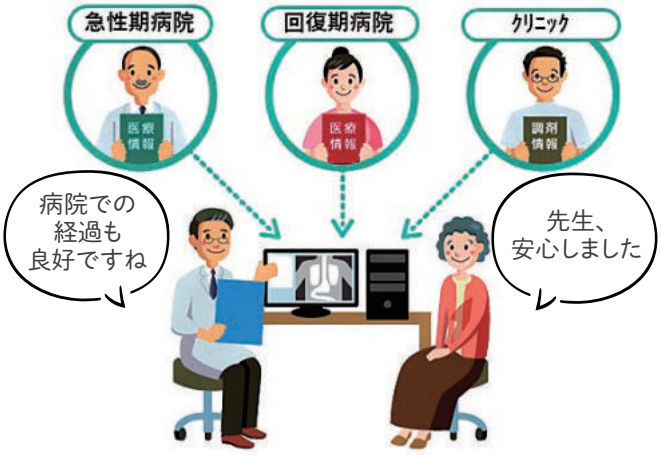
医療相談室へのご連絡は…
☎ 023-625-5555　内線2120,2293
✉ okyakusama@saiseikan.jp

済生館病診連携診療システム「RenkeiNet@（れんけいねっとあい）」をお勧めしております

RenkeiNET@とは、高度で安全な医療を行えるよう済生館とかかりつけ医の先生とで診療情報を共有する電子カルテ閲覧システムです。

RenkeiNET@のご説明

- 電子カルテシステムをご利用されていない医療機関様でも、診療情報を閲覧することが可能です。
- 済生館への紹介時に患者さんの同意書を添えていただければ、済生館受診時より閲覧可能です。
- インターネットに接続しているパソコン(windows11または10)があればご利用可能です。
- 接続の設定は済生館の職員がお伺いし、30分程度の作業で完了します。
- ご利用に伴う費用負担はありません。
- 患者さんの個人情報につきましては、厚生労働省のガイドラインに基づいた暗号化処理を行う等、十分な対策を行っております。



RenkeiNET@のお申し込み・お問い合わせは…
地域医療連携室までご連絡ください
☎ 023-634-7116 ✉renkeisitu@saiseikan.jp

発行：診ます会事務局
〒990-8533 山形市七日町1-3-26　山形市立病院済生館 地域医療連携室
TEL 023-634-7116 E-Mail renkeisitu@saiseikan.jp URL www.saiseikan.jp

画像は患者さんの同意を得たうえで、匿名で掲載しています。